

九州大学学術情報リポジトリ  
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ  
Nakamura Tetsu Digital Archive

---

## ダラエ・ヌールへの道 : アフガン難民とともに

中村, 哲 著

序章 よみがえる溪谷の村 : ダラエ・ピーチの診療所にて

<http://hdl.handle.net/2324/4772346>

---

出版情報 : ダラエ・ヌールへの道 : アフガン難民とともに,  
pp.5-12, 1993-11. 石風社

バージョン : 初版、1993-11-30

権利関係 : ©Tetsu Nakamura printed in japan 1993

石風社より許諾を得て本文を公開しています。

公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。

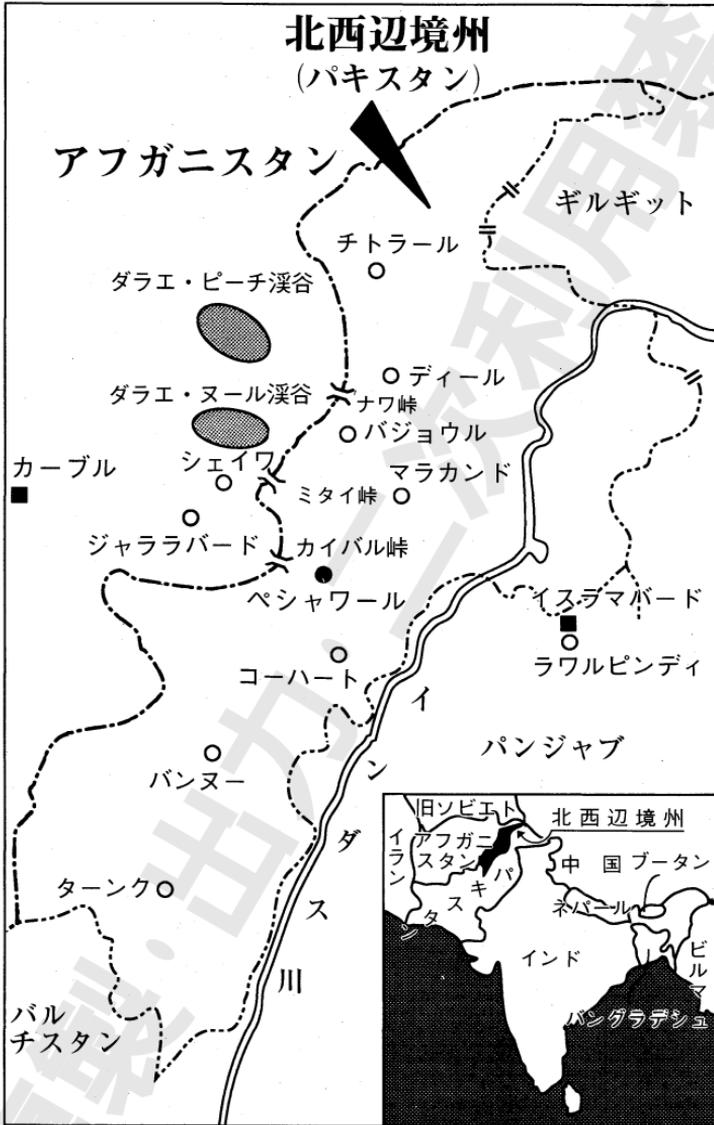


# ダラエヌールへの道

アフガン難民とともに

複製・出力・二次利用禁止

# 北西辺境州 (パキスタン)



序章 よみがえる溪谷の村

——ダラエ・ピーチの診療所にて

埃っぽいペシャワールの喧噪に比べたら、ヒンズークッシュの深い山懐はまるで静かだった。

つい一年半前までの激しい戦闘が嘘のようだ。神々しい銀白色の山々が、人間たちの蛮行と愚劣さを嘲笑するように、かつ無限の包容力で慰めるように、変わらずに我々を見下ろしていた。

茶褐色の荒寥たる岩石沙漠、抜けるような濃紺の蒼穹、氷雪から溶け出す清流、川沿いに点在するオアシスの村々、素朴な村人たち……もうすっかりお馴染みになった光景は、初めてヒンズークッシュの山々を訪れた十五年前と何も変わっていなかった。しかし、この何の変哲もない平和なたたずまいに感銘を覚えたのは、おそらく私だけではなかったろう。ペシャワールに赴任して以来、丁度十年目だった。あの長く重苦しいアフガン戦争の日々は、散在する村落の残骸に名残を留めていただけだった。

ひとときの夢

一九九三年四月、私はJAMS（日本—アフガン医療サービス）のダラエ・ピーチ診療所の進

歩を見るためにアフガニスタンに入り、クナルル河に沿って更に奥地のヒンズークッシュ山脈の一溪谷に滞在していた。一九八六年にJAMSが発足して以来、悲願であった「国内診療所」の第二号が軌道に乗りつつあった。そして、そこで接した「何の変哲もない生活」こそ、我々が人々と共に祈り、歳月をかけて奪い返した掛けがえのないものだったのである。

——一九七九年のソ連軍侵攻に始まる本格的な内乱は、三〇〇万人の難民をパキスタン北西辺境州にたたき出し、郷土を守る住民と政府軍との戦闘は凄惨を極めた。一九八八年にソ連軍撤退が実現するや、今にも難民たちが帰ると錯覚した世界のNGO（民間援助団体）が殺到してからは、事態はさらに混乱した。難民はびくとも動かず、戦闘は反って激化した。NGOは事実上ひきあげ、「アフガニスタン」は混乱を伝えられたまま世界の関心から遠ざかっていった。

だが今、眼前にする光景はどうだろう。自発的な帰郷が始まってから丁度一年、農民たちは自力で荒れた田畑をおこし、目を和ます豊かな田園の緑が静かに広がっている。かつて爆音と砲声にかき消されていた溪流も、白い峰々の氷雪と共に太古から変わらず、そうそうと流れてあったのだ。十余年のアフガン戦争なぞひとときの夢だ。世界の耳目をひきつけるカブールでの権力闘争をよそに、農民たちは黙々と村の復興に励んでいた。農作業の合間には青年たちがJAMSの診療員と共にバレーボールにうち興じ、和やかな笑い声と掛け声が溪流の水音に混じってこだまする。これが、ついこの間まで殺気だった目付きでライフルと対戦車砲を手に、死闘を演じていた同じゲリラたちなのだろうか。審判がのんびりとライフルを背にして、ゲームを観戦している。

序章 よみがえる溪谷の村



爆撃で破壊され尽くした村\*



廃墟となった村が農民たちの力で蘇りつつある

縁えにし

十年の歳月が幻のようであった。それは一瞬のようでもあり、長い長い道程のようでもあった。長い悪夢から突然覚めて安堵した者の気持ちにも似ていた。一つの感慨のようなものが私を支配していた。この人々の生活と笑顔を取り戻すためにこそ、文字通り多くの仲間たちの死を越えて、この十年を賭けてきたからだ。いや、「賭けてきた」と言えば嘘になる。なにもものに引きずられながら、自分でも予想だにできなかった遠くまで、旅してきたような気がした。さながら曼陀羅のように、次々と新たな問いと困難に遭遇し、振り返れば日本から遠い地点に立っていた。

JAMSの事業は今や九十名以上の現地スタッフを抱え、四つの診療所を運営し、現地に根を下ろしてさらに活動的なものとなった。パキスタン北西辺境州のらい根絶計画への協力でも、我々の着手したらいセンター改善は実を上げ、今では名実共に欠かせぬ唯一の治療センターとして機能している。一方、日本側の支持母体「ペシヤワール会」の人々も、騒々しい「国際化」の時流をよそに、十年を黙々と共に歩み、現地事業を支え続けてきた。まさに、国境を越え、宗教を越え、異文化を越え、無数の良心の結晶と言っても誇張ではなかった。そうして、この縁こそ、大切なものを見いだし、自らも喜びを共にしてきた。

「もし」という仮定で過去を振り返るのは徒労かも知れぬ。だが、もし私が一九七八年にピン

ブークツシュ山脈に登山隊について来てなかったら、もし現地と日本で多くの友人たちとの出会いがなかったら、もし私が少年時代に美しい蝶の輝きに魅せられてなかったら、「もし……」と、際限もなく過去の出会いを思わずにはおれなかった。

多くの出会いと別れがあった。私をペシャワールとアフガニスタンの働きに結びつけた先輩や友人、現地での協力者たちの少なからぬ者が、今はこの世を去っていた。しかし、不思議なことに、ここで言えば、生きている者も他界した者も、このヒンズークツシュの白峰を戴く壮大な自然に渾然と溶け合って、生死の垣根を越えて生き生きと私の心に語る。全ては縁えだの繕より合わせる摂理である。意識しようとすまいと、人が逆らうことができぬものなのだ。人はしばしば勝手に、自分で生きているように考える。だが、実は生かされているのだ——改めてそう思った。私もまた、あの一九七八年のヒンズークツシュとの出会い以来、相も変わらずその麓を巡り続けている。この先も、終わらなき旅は続くのだろう。

複製・出力・二次利用禁止